

視力予後とを比較した。

その結果、HEの悪化群では総コレステロールとLDLコレステロールが高いことが示され、視力の経過では悪化群の方が不良であることが明らかとなった。

本研究で得られた知見は、血清脂質に対する治療がHEの悪化を抑え、HEの悪化に伴う視力の低下に対しても有効である可能性を示唆しており、臨床的に重要である。

氏名	エン ドウ ナオ コ 遠 藤 直 子
学位の種類	博士 (医学)
学位授与の番号	乙第 2648 号
学位授与の日付	平成 22 年 10 月 15 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当 (博士の学位論文提出者)
学位論文題目	Efficacy of bromfenac sodium ophthalmic solution in preventing cystoid macular oedema after cataract surgery in patients with diabetes (糖尿病患者における白内障術後の嚢胞様黄斑浮腫に対するブロムフェナクナトリウム点眼液の効果)
主論文公表誌	Acta Ophthalmologica 第 88 卷 第 8 号 896-900 頁 2009 年
論文審査委員	(主査) 教授 岩本 安彦 (副査) 教授 堀 貞夫, 坂井 修二

論文内容の要旨

〔目的〕

糖尿病患者における白内障術後の炎症ならびに、嚢胞様黄斑浮腫 (cystoid macular oedema : CMO) に対するブロムフェナクナトリウム (BF) 点眼液の予防効果を明らかにするために、ステロイド (ST) 点眼群を対照として光干渉断層計 (optical coherence tomography : OCT) を用いて平均中心窩網膜厚を定量的に比較検討した。

〔対象および方法〕

当施設で白内障眼内レンズ挿入術を施行した糖尿病患者で術前の中心窩網膜厚が 250 μ m 未満の患者 62 名 62 眼を対象とした。重度の糖尿病網膜症を有し、網膜光凝固、硝子体手術の適応となる患者、OCT 測定困難な患者、ぶどう膜炎を有する患者は除外した。ランダム化は封筒法により行い、BF 群 (n=31)、ST 群 (n=31) に分け、オープン試験とした。矯正視力、眼圧、細隙灯顕微鏡検査、前房フレア値、平均中心窩網膜厚を、術前、手術翌日、1、2、4、6 週に測定し、両群で比較した。また非増殖糖尿病網膜症を有する症例のみ (BF 群 n=16、ST 群 n=11) を対象として同様に解析を行った。

〔結果〕

背景因子は年齢、男女比、高血圧症、尿素窒素 (BUN)、クレアチニンは両群で有意差は認めず、ヘモグロビン A1c は BF 群において高値であり有意差 (p=0.0035) があつた。手術内容 (超音波時間、手術時間) の差は認めなかった。全例を対象とした検討では、術後 2 週目の前房フレア値は BF 群で有意な低値を示した (p=0.007)。網膜症を有する症例を対象にした検討では、BF 群の前房フレア値は術後 4 週 (p=0.0009)、6 週 (p=0.005) で有意に低値を示した。平均中心窩網膜厚は術後 4 週 (p<0.0001)、6 週 (p<0.0001) で BF 群で有意に低値を示した。ST 群で術後明らかな CMO を認めたものが 2 例あつた。網膜症のない症例の比較では BF 群、ST 群で全検討項目において有意差は認めなかった。有害事象を示した症例はなかった。

〔考察〕

今回 OCT を用いた定量的な網膜浮腫の評価において、BF 点眼液が術後の CMO 予防に有効であることが示唆

された。前房フレア値は術後2週目にBF群は有意な低下を認め、術後早期の炎症予防に有効であると考えられた。網膜症のない症例では両群で前房フレア値、平均中心窩網膜厚に差は認めなかったのに対し、網膜症を有する群ではBF群は有意に前房フレア値、平均中心窩網膜厚ともに低値で、BFは網膜症を有する例でも十分な抗炎症効果があると考えられた。それぞれの薬剤の異なる薬理作用がこれらの結果として考えられるが、糖尿病網膜症の発症、病態の解明と関連して今後の研究課題である。

〔結論〕

BFは白内障術後のCMO予防に有用であることが示唆された。特に糖尿病網膜症を有する患者において有用であると考えられた。

論文審査の要旨

白内障術後の炎症や嚢胞様黄斑浮腫(CMO)に対するブロムフェナクナトリウム(BF)点眼液の予防的効果を、光干渉断層計(OTC)を用いて検討した成績は乏しい。本研究は、一定の基準で選択した白内障眼内レンズ挿入術を施行した糖尿病患者62名を対象に、BF点眼群とステロイド(ST)点眼群に分け、術前・後6週までの平均中心窩網膜厚の変化などを比較した。

その結果、網膜症を有する症例を対象とした検討では、BF群の方がST群に比べ前房の炎症を減らし、平均中心窩網膜厚を有意に低下させることを明らかにした。

BF点眼治療が糖尿病網膜症を有する患者における白内障術後のCMOや炎症の抑制に有用であることを示した本論文の知見は臨床的に重要である。

25

氏名	コバシガワ 小橋川	ツヨシ 剛
学位の種類	博士(医学)	
学位授与の番号	乙第2649号	
学位授与の日付	平成22年10月15日	
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当(博士の学位論文提出者)	
学位論文題目	Bowel lesions of Behçet's disease are frequently detected in non-ileocecal regions as well as in the ileocecum: Clinical features of 51 Japanese patients with Behçet's disease (Behçet病患者の消化病変は非回盲部においても認められる—当科に入院したBehçet病患者の臨床的特徴)	
主論文公表誌	東京女子医科大学雑誌 第80巻 第4・5号 132-138頁 2010年	
論文審査委員	(主査) 教授 小田 秀明 (副査) 教授 江崎 太一, 三谷 昌平	

論文内容の要旨

〔目的〕

Behçet病(BD)は原因不明の全身性多臓器病変である。我々は入院BD患者の臨床症状、検査値などを解析、その臨床的特徴を明らかにする。

〔対象および方法〕

最近11年間に当科入院の邦人BD患者51症例(男性16例、女性35例、平均年齢±標準偏差39.5±12.2歳)の症状、検査からその臨床的特徴を統計学的に解析し、さらに大腸内視鏡検査を施行した33例について、生検標本による病理組織学的検討を行う。